



TITLE:

経済社会学者としてのマックス・ウエーバー

AUTHOR(S):

青山, 秀夫

CITATION:

青山, 秀夫. 経済社会学者としてのマックス・ウエーバー. 経済論叢
1951, 67(1): 1-17

ISSUE DATE:

1951-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132214>

RIGHT:

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷 第一號

經濟社會學者としてのマックス・ウェーバー……………青 山 秀 夫

明治後期の農村經濟……………堀 江 保 藏

山本二三丸著「恐慌論研究」……………恐慌論研究班

昭和二十六年一月

經濟社會學者としての

マックス・ウェーバー

青山秀夫

一 序

前もつておことわり申上げておきたいことがある。

(一) マックス・ウェーバー (Max Weber 1864-1920) の社會理論を理解し利用することは、いろいろの點で、われにとつて有意義である。本稿で私は、經濟社會學者としての彼の特徴のうち、その若干をとり上げて報告するが、私は、こういう特徴づけを通して、彼の社會理論に接近する手懸りをいささか提供したいとおもう。本稿の目的はここにある。彼の經濟社會學を全面的に論評しようとするものではない。

(二) これから、話の引合いとして、ドイツの歴史學派や形式社會學者の仕事が出てくる。もちろん、この方面の私の理解は淺薄皮相である。誤解もあるう。その點は遠慮なく御指摘ねがいたい。しかし、それにもかかわらず、やはりこういう立場の仕事と試論的に對比しながら、ウェーバーの仕事の特徴づけてゆくつもりである。上記の目的のために、この比較はきわめて好都合かつ大切であるからである。

(三) 「マックス・ウェーバーの經濟社會學」というとき、大體何を考へてゐるか。一應ここで簡單にこのこと

を説明してあげる。

「經濟社會學」(Soziologie der Wirtschaft, Wirtschaftssoziologie)という表現は、彼自身、ときどきつかつてはいるけれども、あまり好んでつかつたとはおもわれない¹⁾。しかし、明かに經濟社會學にぞくせしめらるべき實に多くの問題が、彼の著作のいたるところで論ぜられている。現に彼の「經濟と社會」(Wirtschaft und Gesellschaft, G. d. S. III Abt. 1922)においても、「社會行爲の具體的構造形態と具體的な經濟形態との間の助長促進關係の度合」、「すなわち」、それらがたがい²⁾にその存続を促進しあつてどうか、逆に、たがいに妨害、排除しあつてどうか、「専門的にいつて」それらが互に『適合的』か『不適合的』か、さらにまた、それぞれの場合どの程度までそぐであるか」(Grad der Wahlverwandtschaft) konkreter Strukturformen des Gemeinschaftsstands mit konkreten Wirtschaftsformen ob und wie stark sie sich gegenseitig in ihren Bestände begünstigen oder umgekehrt einander hemmen oder ausschliessen : einander „adäquat“ oder „inadäquat“ sind) の問題が——しかもそれについて一般的敘述をこころみることすらもが——その課題のひとつとされているのである³⁾。

1) 拙著「近代國民經濟の構造」二五頁參照

2) 「經濟の社會」S. 183.

この意味で「マックス・ウェーバーの經濟社會學」ということがいえる。ところでこの「ウェーバーの經濟社會學」は、彼の著作でいつた場合、どんな形ちをとつてあらわれてくるか。この點簡單にのべておこう。

ウェーバーの仕事のうち、これまでわが國でよく取上げられたのは、彼の「學問論文集」(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922) の諸論文にしろされた考である。しかし、ウェーバーの仕事を論ずる場合、學問論だけに重きを置きすぎるのはよくない。經濟社會學が問題となる場合には、なおさらそうである。

彼の經濟社會學の仕事をいちばん大きく代表するものは、やはり、上述の名著「經濟と社會」ならびに「宗教社會學論文集」三卷である。さらに初期の「ローマ農業史」「ドイツ・東エルベ地方の農業勞働者事情」、それから彼の「社會史・經濟史論文集」(Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1924)、「社會學及社會政策論文集」(Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik, 1924)にあげられた諸論文、彼の最後の講義「經濟史」(Wirtschaftsgeschichte, Abriss der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1923)は、それぞれ、これに關連して無視できない意義をもっている。さらに、彼の「政治論文集」(Gesammelte Politische Schriften, 1921)の諸論文は、彼の經濟社會學にとつて、直接に關連するところはすくないが、しかし彼の仕事全體の傾向を察知せしめるものとして、間接的には大切である。

1) Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 3 Bde, 1920. 大體において、一九〇四・五年に發表した「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(梶山力氏の立派な邦譯が昭和十三年に有斐閣から出ている)と第一次大戰中發表された「世界宗教の經濟倫理」(「儒教と道教」・「インド教と佛教」・「古代ユダヤ教」の三部にわかれる)から成っている。經濟社會の構造についても、いたるところで、具體的および理論的な分析がこころみられている。

いまのべたウェーバーの仕事のなかに、經濟と社會との關係についての考察がさまざまな形をとつてあらわれている。便宜上、今これを「マックス・ウェーバーの經濟社會學」とよび、その特徴の若干を考察しよう。

1) 拙稿「經濟の場所としての日常——マックス・ウェーバーにおける經濟および經濟學——」(雑誌「經濟研究」第五號收載)は本稿の續稿である。この續稿に對してもいまここのべた注意はその要まあてはまる。

二 歷史學派の後繼者

一九世紀のドイツでは、能力をもつて社會科學に志すほどのものは、ほとんどすべて、歴史にむかつた。シュムペーターはあの「學說史」のなかでかようにのべている。⁷⁾ とういう文獻學的歴史學的研究の領域では、個々の業績の質においてはあまり違いはないとしても、分量的に見た場合には、一九世紀のドイツは英佛にはるかに優つてゐる、とイギリスの史家 G・P・グーチはのべてゐる。⁸⁾ いずれにしても、一九世紀ドイツの社會科學は、歴史を中心にまばゆいばかりの全盛時代を現出した。かういふ歴史的研究の巨大な蓄積の上に、ウェーバーは、曉の明星のごとく、その最後の輝きを示すものであつた。⁹⁾

1) Joseph Schumpeter: *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte*, G. d. S. I. Abt. I. Teil, 2te Aufl. 1924, S. 102.

2) G. P. Gooch: *Deutschland, aus dem Englischen übertragen von H. R. von Heinz*, 1925, S. 98.

3) この點拙著「マックス・ウェーバー」(岩波新書)は或る程度參考にならう。

この場合、ウェーバーの仕事は古い歴史學的蓄積の單なる集大成ではない。むしろこの再編成は新しい光の下におこなわれた。また、それゆえにこそ彼は今日世界の社會科學のうちに生きてゐるわけである。

それでは、ウェーバーは如何にしてこの學問的遺産に新しい生命を與えたか。それまでの業績と仔細に比較しながら、彼の學問的貢獻の大きさを精確に測定することは私にはできない。しかしさしあたり、まず大切とおもわれる論點をのべれば次のとおりである。

近代社會の自己認識、あるいは、「近代合理主義の比較史的自敘傳」(レンナート)、これがウェーバーの歴史の仕事であるといわれる。かういふ評價は大體において正しい。しかしこの點一步立入つて考えれば、結局彼の精神史的位置を問題にせねばならぬことになる。私の乏しい知識をもつてすると、この點について、次の二つの事

情が特徴的である。

第一に、ウェーバーは徹底した政治的自由主義者である。¹⁾なるほど、彼は英米の一切を讃美したわけではない。また、ドイツでもこの方向にはすでにイエーリング、グナイスト、モムゼンなどの先輩があり、彼自身その影響をつよく受けている。しかし彼は、アングロ・サクソンの政治上・社會上の長所をみとめること、きわめて激しく、また、これを分析すること、きわめて鋭かつた。政治に關する諸論文、あるいは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」はこのことをしめす。私には一々仔細にこれを示すことはできないが、この事情は、問題の構成なり史實の見方なりを、これまでのドイツの學者のそれと可成りことなつたものたらしめている、とおもわれる。

1) 拙稿「マックス・ウェーバーに於ける國民主義と自由主義」(拙著「マックス・ウェーバーの社會理論」所收) 参照。

第二に、ウェーバーにおける純粹キリスト教徒的、ないし、清教徒的な契機がある。一切の幻想をしりぞけた沈鬱かつ生真面目な人間觀。しかも、それゆえにこそかえつて理想主義的・行動的な生活態度。日常と世俗との尊重。非凡な英雄ないし達人 (Virtuose) と平均的な凡夫・大衆 (Masse) との、特に倫理における、區別に見られる「原罪」思想の深い浸潤。啓蒙思想におけるあの樂觀主義的人間觀と「進歩」(Progress, Fortschritt) の思想との否定。こういう點において、彼の立場は啓蒙思想よりも、それ以前の時代たる宗教改革——特に「禁欲的プロテスタンティズム」——にちかい。²⁾ヘーゲルなどとの對照點の一つもここにもとめられるであらう。

1) この點は岩波新書の上掲拙著でやや立入つてゐた。

ウェーバーの精神史的位位置について特に注意をひくのはこの二點である。この二點のため、彼の體系構成がこ

れまでのドイツの社會科學とどうちがつてきているか。残念ながら私にはこれをたしかめる能力がない。ここでは經濟社會學に問題を限定して、話をすすめるほかない。

さてこの場合、まずわれわれの注意をひくのは、彼の學問論上の仕事である。周知のように、方法論上の彼の仕事は歴史學派批判を主眼とした。當然このことがまず問題とされねばならぬ。ところで、この批判のうち、

(a) 概念がただちに實在であるかのごとく見たのに對して、文化科學は實在の一面を、價值關係的に、とらえるにすぎぬと主張したこと、

(b) 學問と政策との混同に對して、その峻別を強調したこと、

(c) 有機體思想あるいはそれに近い立場に對して方法論上の個人主義をとつたこと

については、かなり廣く知られたことであるから、ここには立入らない。ここで重要なのは、

(d) これまでの發展段階説的構想に對して、有名な理想型の理論に立脚して、獨特の類型學的方法をとつたことである。この點もすでにくわしく論じたからここには繰返さない。そこで論じたように、カズイステイツシュに編成された、要素型にぞくする理想型の概念圖式が分析の根柢におかれるわけであるが、ここではこういう一般的な概念圖式に焦點をおきながら考察をすすめたい。

1) 拙稿「マックス・ウェーバーに於ける近代資本主義の概念——その類型學的方法との連關に於いて——」(拙著「マックス・ウェーバーの社會理論」所収) 参照。

さてそれでは、こういう要素型の一般的概念圖式はどういう意義をもつか。こういう一般的概念圖式は歴史的發展段階の圖式であるよりも、*transjensech* に人間の代替的・擇一的可能性を圖式化したものであるようにおもわ

れる。人間そのものにそなわっているさまざまな alternative な可能性を、やや極端にいつて、歴史をはなれて、人間そのものの平面においてとらえてつくつた圖式、こういう圖式を一般的概念圖式は——それが基礎的であれば、それだけ強い程度で——目ざしており、ウエーバーは歴史や社會の分析をこういう圖式の上におこうとしていたようにおもわれる。¹⁾ 換言すれば、彼の歴史學的研究は、もちろん歴史學の約束に嚴重にしたがうけれども、しかしさらにそこから、時の流れという垂直の座標軸をはなれて、超歴史的な水平面に射影して、人間そのものを把握することに向かうとしている。例を挙げながらこのことを示そう。

1) しかしこの場合ウエーバーは、専門的な哲學者のように、人間の行動の背後にある意識を體系的に分析してその圖式をつくり、この行動の内面から概念圖式をきずくということは、——恐らく努力していたのではあるが——、陽表的にはあまりこころみない。人間の行動あるいは社會關係として外面にあらわれたところ、それから出發して、法規における概念構成をおもわせる仕方で、基礎的概念圖式を構成するというのが、大體においてウエーバーのやり方であつたようにおもわれる。これは理由のないことではない。しかし彼の概念圖式が、このため、非常に見透しにくいものとなつていことも事實である。

この點、あの（社會的）行為の四つの型の理論は、それが有名なだけに、この例證としていちばん有益であろう。周知のとおり、ウエーバーは、一方の極に無意識的な行動（たとえば癖になつてゐる身振）をおき、他方の極にもつとも意識的な「目的合理的行為」（經濟學の「選擇の理論」がえがくごときそれ）をおき、その中間に「情緒的行為」「價值合理的行為」「傳統的行為」をおいている。²⁾ この Kasusik は、人間の歴史のなかからとり出され逆にまた、人間の歴史に投げかえされてゆくけれども、それ自體としては、「人間」そのものの平面においてつくられた一般的理想型的圖式といわねばならぬ。

1) 「經濟と社會」SS. 12—13. 拙著「近代國民經濟の構造」p. 30. 以下「マックス・ウエーバーの社會理論」p. 32. 以下を見

られた。

圖式が一層具體化した「支配の型」の場合になると、歴史的色彩がかなり濃厚になる。しかし、この場合においてもこの圖式は、それ自體としては、發展段階的なものではない。やはりそれは、客觀的制約と主體的條件とに應じて實現の組合せを異にしてあらわれるところの、人間そのものの可能性の諸方向として考えられるし、また、たとえばカリスマ的支配の取扱ひにしても、現に、こういう見方を支持する。

1) 「經濟と社會」S. 123ff.; S. 603 ff. 「宗教社會學論文集」第一卷、S. 267 ff. 拙著「構造」p. 83. 「社會理論」p. 253. 以下を見よ。

2) ウェーバーが近代的政黨の成熟した姿をカリスマ的な Führer-Gefolgschaft 的構造に見ようとしていることはすでに注意した(拙著「社會理論」p. 264)。なお「經濟と社會」S. 165 ff., S. 265. などを見よ。

第一次大戰中、左翼的傾向の青年たちの討論にあたつて、「人間というものはあまりかわらないものだ」とウェーバーは敍べている。歴史において千紫萬紅の變化を示す人間、この變化をウェーバーが否定しようとするものでないことはいうまでもない。彼が主張したのは、人間は變化しうるにしても、その可能性に限界があることである。ウェーバーはたえずこの限界を問題としたし、この限界内部での變化の可能性を人間の歴史を通じて探求し、さらにその思索(自己反省)の結果をかような一般圖式に表現したのである。²⁾

1) Marianne Weber: Max Weber, Ein Lebensbild, 1926, S. 609.

2) ここに言及のいとまがないが、このことは、「宗教社會學論文集」の歴史的研究所の問題構成を分析することによつて、一層明瞭に示されるであらう。

方法論上の批判もさることながら、上記のような一般圖式を分析の基底においたこと(あるいは、この方向を目指

していること)が、歴史學派と比較した場合の、ウエーバーの歴史的研究の特色であるようにおもわれる。この點については、社會學・社會心理學などの理論的社會科學のその當時の發達がその大きな刺激となつてゐることは無視できない事情であらう。それでは、こういう一般圖式の上で、ウエーバーの社會理論はどういう特徴をもつてゐるか。形式社會學とくらべながら、次にこの特徴について考察しよう。

三 形式社會學との對比

テンニース (Ferdinand Tönnies) やジムメル (Georg Simmel) など、當時のドイツの社會學者はたいていウエーバーのしたしい友人であつた。別に立入つて論及したり、批判したりすることはないけれども、ウエーバーはしばしば、これらの社會學者と類似の問題を類似の方向で取扱つてゐる。學問的接觸が深かつたことは明かである、しかしウエーバーの社會理論は彼等のそれに對して相當異色をもつてゐる。こういう特徴としてはさまざまのものが挙げられようが、ここではいわゆる百科全書的傾向とよばれるものに注意したい。ウエーバーの社會理論は、基礎論からはじまつて、經濟・政治・法・宗教・教育・音樂などの個々の生活領域にまでおよんでおり、彼の社會理論の特徴はしばしばこの點にもとめられる。²⁾ここではこの點にまず注目したい。

1) 彼には藝術社會學の計畫もあつた(『傳』S. 509)。

2) あまり注意されないけれども、ウエーバーで民族の傳統の比較社會的分析が大切であつたことも指摘されてよからう。もちろんこれは立入れない。

宗教が原始呪術から預言者宗教にまで純化され合理化されてゆく場合、「いつでもその倫理的要求は、同胞愛

(Brüderlichkeit) を、社會團體の一切の制約をこえて、時としては自己の信仰共同體のそれをすらこえて、普遍化してゆこうとする普遍主義的傾向をもつた。しかしこういう宗教的普遍主義的同胞愛は、それを首尾一貫しようとするほど、それだけ峻烈に此世 (die Welt) の諸秩序および諸價值に、いつも、激突した。しかも、此世の側がそれ自體その固有法則性 (Eigengesetzlichkeit) にしたがって合理化され純化されてゆけばゆくほど、この相剋が、いよいよ融和できない形ちで、その力を強めてゆくのが常であつた。」

1) 「宗教社會學論文集」S. 541, 542, 543. 「經濟と社會」S. 331. 「政治論文集」S. 60, 489. など。

幾たびか繰返して説かれてゐるこの考えは、歴史と社會とに對するウェーバーの見方の根本にふれてゐるとおもわれる。宗教とか、經濟とか、政治とか、法律とか、藝術とか、とにかく人間生活の個々の部分領域は、それぞれ相對的に獨自な、內在的必然的な「固有法則性」をもつてゐる。それは「學問の約束」「藝術の約束」といわれたり、「經濟の nature」とか「經濟のロジック」といわれたり、あるいはまた「法の世界」といふとき表現でとらえられるものであるが、呼び名はどうでもよい。とにかく個々の生活領域は、獨特の *sense* 色彩をもち獨特の世界を形成し他からの制約をこうむりながら、しかもその「世界」に內在的・必然的な運動法則にしたがつて動こうとする傾向をもつものである。ウェーバーは個々の生活領域に對して、いわば超歴史的に、こういう *Eigengesetzlichkeit* を考える。それは人間の生活とともにあつたものである。また、その間に矛盾相剋ないし緊張 (*Spannung, tension*) の可能性をふくんだものである。しかしこの事情は最初は目立たなかつた。社會が近代化され合理化されてゆくにしたがつて、このロジックは (その認識においても社會における現れ方においても) 漸次明確になり、その間の相剋がいよいよ顯著に露呈されるようになった。(ウェーバーによつては、この過程が合理化に他ならな

つた。——歴史と社會とに對するウェーバーの考察において、この見方は根本的意義をもつものである。

1) しかもこの場合、責任が關係せしめられる價值理念は、ウェーバー自身必ずしもはつきり説いたとはいえないが、大體に
おいて上記の宗教倫理、とくに「山上の垂訓」に典型的に示されたような同胞愛の心情倫理であつた。

社會理論の基礎的範疇について、換言すれば、形式社會學者が社會學固有の對象とする問題について、ウェーバーは理論的考察をこころみた。しかしウェーバーはそれだけにとどまらなかつた。彼は、こういう基礎論に緊密に連絡しながら、經濟・政治・法・宗教などの個々の生活領域について、かなりくわしい専門的考察を（理論的にも歴史的にも）こころみた。そしてこの場合中心的役割を演ずるのは、かような固有法則性であつた。すくなくともそれは、彼のこういう包括的な社會理論を全體としてとらえるに缺きえない手懸りであるし、また彼の理論をわれわれの問題に結びつける何より大切な結節點である。

ウェーバーの社會理論のこういう特徴について、形式社會學との對立を云々することは早急に失するであらう。なるほど形式社會學は、個々の生活領域から抽象された、それらの共通な社會關係を社會學獨自の研究對象に設定した。しかし、具體化にあたつてふたたび個々の生活領域の考察（經濟學・政治學・法學・宗教學など）とむすびつく必要を否定したわけではあるまい。ウェーバーはこの具體化を、それぞれの生活領域の固有法則性に重點をおいて、こころみたまでである。

この意味でウェーバーの仕事は、形式社會學に對して、對立ではなくむしろ擴充である。しかもその擴充は、「淺く廣く」というよりも、むしろ「狭く深く」おこなわれた。彼は心情的な同胞愛倫理を價值理念とし實在をこれに關係せしめ、その結果、「近代合理主義の比較史的自敘傳」において歴史をとらえた。——かようにい

去ることは、やや誇張をとまなうにしても、これが、晩年にいたるにしたがつていよいよ強められていつた彼の學問の傾向であることは、うたがいない。

1) 固有の社會學に對して、經濟社會學・政治社會學・法社會學・宗教社會學などを考えるとなれば、ウェーバーの場合、それはこの問題に重點をおいて構成されることになつてゐる。(この點、宗教社會學の場合には、「宗教社會學論文集」第一卷の劈頭の *Vorbemerkung* がしめすところ、きわめて明瞭であるが、他の場合についても同様なことがいえよう。) 經濟社會學などの構成にあたつて、こういう取扱いがどこまで妥當であるか、讀者の意見をうけたまわりたい。

ウェーバーは個々の生活領域まで、かようにして、社會學的考察の對象にとり上げる。これが彼の社會理論の顯著な特色であることはいうまでもない。しかし彼の社會理論の一般圖式における特徴はそれだけにとどまらない。次に二三の重要な特徴についてのべたい。

四 一般圖式におけるその他の特徴

社會は *ゲマインシャフト* (*Gemeinschaft*) から *ゼエルシャフト* (*Gesellschaft*) にむかつてすすむ。周知の通り、*デニニース* は *ゲマインシャフト*・*ゼエルシャフト* の兩極的概念をたて、これに精緻なる分析と明晰なる敘述とをあたえ、さらに、それまでかなり普及していた思想に上記のような定式化をあたえた。もちろん、ウェーバーといえどもこの *デニニース* の遺産を根本から否定するわけではない。むしろ、しばしばそれによりかかつてさいへる。

しかしそれにもかかわらず、*デニニース* に比してウェーバーの考えは二三の點で特徴をもつてゐる。次にこの

ことを説明しよう。

まず何よりも注目したいのは、こういうゲゼルシャフトへの進行、ウェーバーのいわゆる合理化の根本動力について、二人の間に見解の相違があることである。¹⁾

1) たしかに、テンニースが説く「ゲゼルシャフトへの進行」とウェーバーの「合理化」との間には距離がある。しかし、テンニースの「Kulturbedeutung der Religionen」(F. Tönnies: Soziologische Studien und Kritiken, II, Jena 1926.)におけるウェーバー批判は、以下のような對照を可能ならしめる。恐らくそこでのテンニースの見解は、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で別に名前をあげることなく論争の對象においた立場を、もつとも典型的な形で表現したものと見える。

何よりも商人、つぎには政治家・學者、こういうものがになう理知の働きが、テンニースでは、ゲゼルシャフトへの進行の根本動力と考えられる。社會の近代化には、ウェーバー的な表現をつかえば、こういう世俗的(säkular, profan, säkular) な力だけで充分であり、別に非合理的・宗教的な力、すなわち、來世における救済の欲求から出發する熱情、というごときものは必要ではない。したがつてまた、近代社會の成立もなしくずしに連續的におこなわれ、飛躍ないし斷絶をふくむものではない。——これがテンニースの考えである。恐らくテンニースだけでなく可成り廣汎におこなわれている思想といえよう。ウェーバーの考えはこれと對立する。

テンニースが示したように、さまざまの世俗的な力(とくに商人のそれ)に合理化作用があること、このことをウェーバーは決して否定しない。ウェーバーもまた、近代社會の成立が、こういう世俗的な力にささえられ、それと複雑にからみ合いながら、おこなわれたことを否定しない。

しかし、近代社會の成立にはこういう世俗的な力だけで充分であらうか。

ウェーバーはこれを否定した。いま、きわめて要約的にその論旨だけのべるならば、次のとおりである。¹⁾

1) この點いちばん要約的な敘述は「經濟史」538以下に見られる。「一見逆説的なこの主張について、『宗教社會學論文集』第一卷所收「プロテスタンティズムの倫理」第一章、「儒教と道教」第七・八章などに立入つた根據づけが見出される（私自身も岩波新書の拙著でややくわしい説明をこころみた）。しかしこの點については、同時に、營利の前近代的形態、すなわち、前近代的資本主義の問題がこれにからまるであらう。

近代以前の社會を特徴づけるのは傳統の神聖視である。そこでは特權層およびそれに寄生する「前近代的資本家」の生活は、この傳統的支配機構による擄取にもとづき、したがつて、彼等の關心はこの傳統の溫存に、意識的にか無意識的にか、強く集中される。權勢欲・物質的欲求などの世俗的な力が傳統主義をかえつて強化するわけである。さらにこの上に、前近代の大衆の宗教意識を特徴づけるあの呪術(Magie, Zauberei)が傳統の根強い支持として作用する。それゆゑに、模範的な營利の國、中國が示すように、世俗的欲求はそれだけではむしろ社會を停滯化し、呪術の異常發育（ウェーバーのいわゆる magische Rationalisierung）をもたらしことになる。この盤石の傳統を破碎するためには、世俗的な力によつての合理化作用に好都合な客觀的條件が充分に準備された上に、さらにその上に、此世の大衆に志向した合理主義が、非世俗的な動機にささえられながら、強力かつ大量的にあらわれることが必要である。これがイギリスの清教徒のはたした仕事である。

1) 上記のウェーバーの主張は、前近代に關する周到廣汎な彼の歴史學的分析にもとづいている。しかし、こういう前近代における世俗主義の停滯化作用の例示として、彼はとくに中國社會を——いわば清教主義の「裏」として——利用したようである。

實際、「營利衝動が、いや、富だけを高く評價する態度と功利的な合理主義とが、それ自體としては、近代資本主義（の創出）と何らかわりをもたない」ということが、この典型的な營利の國の分析の一つの重要な歸結なのである。（『宗教社會學

恐らくこの論争におけるテンニース對ウェーバーの對立をあまりに過大視することはあやまりであろう。しかしそれにしても、テンニースはウェーバーが立論の基礎において前近代社會の歴史學的分析にほとんど一指もふれなかつた。對立を過度に誇張してはならぬにしても、しかしこの點に關するウェーバーの指摘はたしかに注目すべき論點をふくむといわねばならぬ。

上記はテンニースとウェーバーとの間で明瞭に對立した論點である。かように明瞭な對立はしめさなかつたけれども、ウェーバーが前近代における自發的結合を重要視したことも、今一つの注目すべき點ではないかとおもわれる。

近代におけるゲゼルシャフトは人間の間の自發的な結合、しかも全人格的でなく部分的機能的であり理知的打算的な自發的結合である。しかし、前近代に自發的結合が存しなかつたか、というところではない。しかもそれは、前近代社會のダイナミクに對して、決定的意義をもつときものである。¹⁾ただそれは、全人的情緒的であつた點で、近代のそれと全然色彩をことにしている。²⁾この點については、*synokisimos* や *continatio* などの都市形成的 *Verbrüderung* もあることながら、ウェーバーがカリスマ的支配とよんだ構造をもつた集團がその典型的な場合といえよう。預言者あるいは英雄の呼び聲に對して、意識の最深層にとどめがたい共鳴を感じ、生家・故郷・因襲をふりすてて結成された集團である。

1) さまざまの歴史的事實を通じてこのことを明かにしたこともウェーバーの二つの貢獻といえよう。

2) 晩年の著作「經濟と社會」(s. 21)では、ウェーバーは、ただ結合が感情のか理知的かだけにとづいて、*Vergemeinschaft-*

tung と Vergesellschaftung とをわかつた。したがつてこういう場合は、ウェーバーにしたがえば、自發的であつても、Vergemeinschaftung にぞくする。

周知のように、テンニーズは Wesensville と Kurville との區別をといた。ここまで掘下げて問題を論ずることが必要かもしれぬ。しかし今はその餘裕もない。しかしいすれにしても、前近代の自發的結合に大きな意義をみとめ、これに特殊な位置をあたえたことは、ウェーバーの理論の一つの大きな特徴といわねばならぬ。

さらに、ゲマインシャフト的關係とゲゼルシャフト的關係との間に推轉の可能性をウェーバーがみとめたことも一つの相違點かもしれない。

もともと彼は「大多數の場合、社會關係には Vergemeinschaftung と Vergesellschaftung とをあわせそなえてゐる。すなわち、部分的には Vergemeinschaftung の性質をもち、部分的には Vergesellschaftung の性質をもつ」というのが大多數の社會關係である。」しかも、ゲゼルシャフト的關係はその上にゲマインシャフト的關係が生まれることを容易にし、ゲマインシャフト的關係はその上にゲゼルシャフト的關係が生まれることを容易にする、しかもこの事實は歴史的・社會的に見てかなり重要である、とウェーバーは考える。

1) 「經濟と社會」S. 22

2) 「經濟と社會」S. 22, S. 185 ff.

晩年の著作にぞくする「經濟と社會」第一部において、巨視的な集團の型としてゲマインシャフト・ゲゼルシャフトを考えず、むしろ微視的に關係の型として Vergemeinschaftung と Vergesellschaftung とを對照した所以も上記の事情によつて容易に理解されよう。いすれにしても、ウェーバーの上記のような問題設定、その廣汎な

歴史の知識に照應させようとする現實主義的態度、こういう事情は、ウェーバーをして、おのずからテンニースとなつた概念圖式の構成におもむかせたのであらう。

- 1) 社會關係のうち、闘争と支配とを重要視しこの分析がさまざまな形できわめて詳細になされていること、また、*Gesinnung, Lebensführung, Menschentypus* などの名のもとに、ウェーバーが主體的態度の型（社會的な型としての「性分」ないし「氣質」「かたぎ」）に考察の焦點をおいていることも、彼の一般圖式の特徴として注意されてよからう。しかしこの點ここには立入らなう。